

# 令和7年度 アーツ前橋事業評価調書(1)

資料 2-(2)

基本事項	事業名		地域アートプロジェクト 滞在制作事業						
	事業1	アーティスト	マームとジプシー(展示)		期間	9/20-12/21	日数	50	
	事業2	アーティスト			期間		日数		
	事業3	アーティスト			期間		日数		
	担当者		学芸:宮本武典、東美沙季 事務:菅原梨恵						
	目的・目標 (総括表)		アーツ前橋の「美術」と、前橋文学館の「文芸」の間にある表現領域として、「演劇」作家による前橋市中市街地のリサーチと、その成果を基にした映像詩の現地制作を行い、従来の「地域アートプロジェクト」に新たな視点と手法の導入を試みる。また、その成果として館外の施設や店舗と連携した「まち歩き」型の展示を組成し、広瀬川河畔に点在する前橋空襲や近代製糸工場の記憶を語り継ぐ。						
	キーワード		前橋市中心市街地の歴史・記憶を語り継ぐ、演者不在の街演劇・映像詩・インスタレーション						
他団体との連携 (共催、協力等)		高崎商科大学   川又彩夏、元市議会議員   岡正巳、サポーター   松本勉、ワンダーフォーゲル   関隆行、建築家   木暮勇斗、前橋空襲の語り部   原田恒弘、上州文化ラボ / 安田倉庫管理者   村上雅記、あたご歴史研究会   田名網雅久、フリッツアートセンター   小見純一、前橋文学館							
参加作家		藤田貴大		青柳いづみ		藤沢ゆき			
関連イベント・人数		前橋文学館3階《Curtain Call》入場者数 計3,498人							
① 投入(支出)・③ 結果(収入)	印刷物等		チラシ						
			13,000部						
	財務指標		収入(A) 別表から転載	支出(B) 別表から転載	収支比率 (A)/(B)	一人当たり コスト	収入内訳		
							観覧料	交付金	自治総他
	予算		1,735,000円	3,470,000円	50.0%	-	-	1,735,000円	-
	決算見込		1,416,950円	2,833,900円	50.0%	-	-	1,416,950円	-
差額		-318,050円	-636,100円		-	-	-	-	
予算/決算		81.7%	81.7%	100.0%	-	-	-	-	
② 内容・活動	〔②内容〕 事業の概要		事業の概要 (転記)	開館10周年記念展「ニューホライズン」で大型インスタレーション《瞬く暇のあいだに漂う》を現地制作した演劇集団「マームとジプシー」を、2024年度の地域アートプロジェクト作家として再招聘し、広瀬川河畔での継続取材の報告会を、前橋文学館のリーディングシアターで実施した。今年度(2025年度)はその成果を基に、秋季企画展「ゴースト」にあわせ、演者不在の街演劇《Curtain Call》を、市内の5会場をつないで発表した。					
	〔②活動〕 主な取組(手段)の結果 ・メディア等広報実績 ・新たな試み 関連イベント 助成 など		広報戦略 ・新たな試み (転記)	先述の通り、「アーツ前橋」におけるアーツの展開を試みるため、美術家ではなく演劇作家を招聘した。また、前橋文学館との連携を強化し、当館の観客層とは異なるコミュニティ(文芸・演劇)にアプローチするとともに、街歩きを鑑賞体験に組み込むことで、美術館・文学館を起点とする文化観光との接続を試みた。					
	●指標 来館者反応 手ごたえ アンケート		広報実績 [新規掲載や 効果が大き かった媒体な ど、特別な案						
			新たな試 みの実績	本企画の戯曲制作は、戦災の体験者や近代製糸の研究者への聞き取り調査と、インタビューから提供された各種資料の分析を組み合わせることで記述された。結果、戦中戦後の前橋の変遷について詳細な証言を得ることができ、その成果を展示《Curtain Call》(ゴースト展と同時開催)にまとめて地域社会に還元することができた。また、前橋文学館および広瀬川河畔エリアとの発展的連携として、同展示は文学館3Fのオープンギャラリーをはじめ、街なかの4つの会場で開催でき、2026年に開催を控える前橋国際芸術祭2026に向けたスタディとなった。					
③ 結果	数値目標		指標1	目標			実績		
			指標2	目標			実績		
				目標			実績		
			コミット人数(事業・イベント等参加者数・実績)				---		
	進捗管理 [スケジュール観]		①概ね円滑に進んだ B.遅延気味であった(内容: )						

## 令和7年度 アーツ前橋事業評価調書(2)

事業名	地域アートプロジェクト 滞在制作事業			
④ 成果	観覧者層のターゲット (転記)	「マームとジブシー」は文芸・音楽・ファッションなど、他領域とのコラボレーションでも知られ、現代演劇で高い評価と人気を獲得している。本企画は、そうしたカルチャーシーンのフォロアーと、当館の開館以前から前橋に根ざしている「詩」と「演劇」のコミュニティへの接続を意識して組成した。		
	成果	県内外から演劇ファンが集まっただけでなく、日頃から前橋文学館の活動に参加する詩のコミュニティなど、幅広い観客層、多様な地域・世代からの参加者が見られた。		
	ねらい1 (転記)	① 演劇メソッドによる地域アートプロジェクトの可能性		
	成果	聞き書きによって収集した情報を、テキストや音声など用いた「物語」として提示することで、美術だけに偏らない幅広い文化愛好家にリーチできた。また、舞台美術の知見や役者の身体性を、美術館内やまちなかでのサイトスペシフィックな展示に応用することで、美術と演劇双方の表現の拡張につながる事が確認できた。		
	ねらい2 (転記)	② 文化拠点の連携(美術館と文学館をつなぐ)		
	成果	美術と文芸を橋渡しするプロジェクトとして演劇作家によるプロジェクトを組成した。2024年度は前橋文学館リーディングシアターの利用にとどめたが、前橋文学館との2館同時展示となった《Curtain Call》は「ゴースト」展の入場者数が好評だったことで、市街地を徒歩で周遊・鑑賞する本企画の体験者が多く、連携店舗の満足度も高かった。		
	ねらい3 (転記)			
⑤ 波及効果	個別評価	<p>&lt; 1～6は、記入項目の例・無い場合は削除。独自の評価項目の設定可。記入日を記載 &gt;</p> <p>マームとジブシーによる本プロジェクトのリサーチと中間報告会《湧きあがってくる時間》、そして2025年度の《Curtain Call》の市街地展開を通して、アーツ前橋周辺の文化資源や歴史を継承し、語り継ぐための活動を行っている様々な団体や研究者とつながることができた。プロジェクトによってもたらされた場や人々との連帯は、アーツ前橋によるアート事業を周辺地域に拡張していく上で貴重かつ重要なネットワーキングの契機となった。</p> <p>※記入日を()内に入れてください</p> <p>※概ね1年経過毎に再確認して修正</p>		
	自己評価(担当者)	<p>効率性 ①:③ 事業が効率的だったといえるか</p> <p>合目的性 ②:④ 事業の目的を達成したといえるか</p> <p>事業の将来性 ②:⑤ 館の事業に対し将来性があるか</p> <p>社会的将来性 ③:⑤ 社会への影響に将来性があるか</p>	<p>1.非常に良い    <input type="radio"/> 2.良い    3.普通    4.劣る</p> <p>1.非常に良い    <input type="radio"/> 2.良い    3.普通    4.劣る</p> <p>1.非常に良い    <input type="radio"/> 2.良い    3.普通    4.劣る</p> <p><input checked="" type="radio"/> 1.非常に良い    2.良い    3.普通    4.劣る</p>	
	課題・改善点	2024年度-2025年度ともに招聘作家の知名度と実力に対して「地域アートプロジェクト」にかけられる予算が限られたため、単年度ではなく3か年に分散してプロジェクトを設計せざるを得なかった。そのため館外の市街地に実装できる作品規模も得られる波及効果も予算範囲内にとどまっている。アーツ前橋として地域での企画組成にどの程度のリソースを割くのか、開館理念に立ち戻ったミッションの整理が必要である。		
	引継ぎ事項(特記事項)			
コメント・意見	館長 副館長	美術と文芸を橋渡しするプロジェクトであり、市街地を巡る展示や文学館との連携により、多様な観客層に地域文化への関心を促す成果が得られた。今後は、限られた予算の中で地域アートプロジェクト事業をどのように位置づけ実施していくのか整理・検討する必要がある。		
	運営 評議会			